

加瀬みきの ワシントン発 グローバル随想



イラスト・題字：長峯亜里

第5回

最高裁の小さな巨人の 死の衝撃

ルース・ベイダー・ギンズバーグ最高裁判事が亡くなった。偉大な業績を残した彼女の死は、女性やマイノリティの権利、新医療保険制度加盟の条件、そして大統領選挙の結果までとアメリカ国民全てに大きな影響を及ぼす可能性がある。

ギンズバーグの棺は最高裁判所に2日間、続いて議会にも正装安置されたが、これは大統領や大物議員に与えられる最高の荣誉であり、女性として初めて、最高裁判事としてもわずか2人目。家族や同僚判事など司法関係者、軍の指導者、上下両院議員ばかりか、徹夜組も含め全国から多くの人々が訪れ何時間も行列し別れを告げた。



最高裁前にはたくさんの花や写真が置かれた

法の下の平等を広めた一生

彼女は「タフで勇気があった」、でも「思慮深く、慎重で、思いやり深く、正直だった」。アメリカを「法の下の平等な正義」に近づけたと告別の辞を述べたジョン・ロバーツ首席判事は、彼女は「去ってしまった」と目を赤くはらしていた。「彼女はオペラの巨匠になりたかつ

たらしい」、でも代わりにここ最高裁というステージで「ロックスターになった」と業績の大きさとともに、一般市民にいかにか親しまれたかを表現した。

ギンズバーグは差別を身に染みて知っていた。ハーバード法律大学を卒業しても当初採用する弁護士事務所がなく、法務書記として受け入れる判事もいなかった。それだけに、女性が平等の権利を得られるよう戦い続けた。今アメリカ人の女性たちが当然の権利と思っている住宅ローンやクレジットカード発行、陪審員資格、年金受給、介護保障はいずれもギンズバーグが女性の権利として裁判で勝ち取ったものである。

差別は女性に限ったものではない。ギンズバーグは、母親の介護をしながらも独身男性ゆえに介護の税控除を受けられなかった男性を介護。税法が性により差別をしていることを明らかにし、それにより多くの法律が改正された。

最高裁が決める身近な重大問題

中絶の選択と同性愛者の法的権利、そして銃規制の範囲は長年アメリカを二分してきた問題である。「個人の選択の自由」対「宗教を含めた伝統的価値観」の衝突であるが、これらの 이슈がアメリカ人の大統領選挙での投票動向を決め、友人関係までを支配することも多い。